

トマスにおける創造について

飯塚 知敬

トマス・アキナスは、彼の著作『能力論』(*De potentia*) 第3問で、神の創造(creatio)を問題としている。⁽¹⁾これは、第2問のペルソナの発出に続いて、被造物の神からの発出を問題としているのである。神におけるペルソナの発出が、本性的、必然的であるのに対して、被造物の発出としてのクレアチオは、神の自由意志に基づいている。⁽²⁾さて、クレアチオに依って存在を与えられた自然的事物は、この自然的世界において、自然的作用の相互の連関の内に在る。そして、この世界においては、古代の自然哲学者達の共通の見解であったとされる命題「無からは何もも生成しない」(*ex nihilo nihil fit*) が成立するように思われる。これに対して周知の如く、クレアチオは「無から」(*ex nihilo*) の生成と言われるのである。この小論では、トマスのクレアチオ論を、主に自然的作用と比較することを通して、クレアチオについて若干の解明を試みたい。

I

先ず、トマスがクレアチオについて、また〈*ex nihilo*〉について与えている説明、解釈を見てみよう。トマスはロムバルドゥスの『命題集註解』第2巻において次の様に述べている。始めにトマスは「クレアチオとは、事物をその全実体に即して、存在(*esse*)⁽³⁾の内に産出することである」とする。その後で、クレアチオが「無から」(*ex nihilo*)⁽⁴⁾と言われることに関して以下の3つの説明を与えている。

(1) 〈*ex nihilo*〉とはクレアチオに先立って、クレアチオに依らないといったものは、何物も前提とはされないこと、を意味している。例えば自然的な作用としての「運動」(*motus*) 「生成」(*generatio*) は、「基体」(*subiectum*) や「質料」(*materia*) を前提し

て始めて働くのである。これに対しクレアチオは、基体ないし質料も合わせて産出するのである。

(2) 〈ex nihilo〉とは、被造物において非存在 (non esse) が、存在 (esse) に先行することを意味している。この先行性とは時間的ないし持続における先行性ではなく、本性の先行性 (prioritas naturae) である。つまり、被造物は自己の存在の原因でない以上、他者に存在を依存しているものであり、他者から由来するものとして存在は、自己の本性に基づくものより後なるものとされる。この意味から他のテキストでは、秩序⁽⁵⁾ (ordo) に基づくと解している。

(3) 〈ex nihilo〉とは(2)の場合と異なり、存在より非存在が時間的、持続的に先行する、という意味で解釈される。この解釈においては、被造的世界は常に存在したことが否定されると共に、世界はその始まりを持つこととなる。トマスは(1)と(2)の意味で、クレアチオが理解された場合、クレアチオは論証可能であるが、この(3)の意味で理解された場合には、論証不可能であり、信仰箇条に属するとしている。

以上、クレアチオの〈ex nihilo〉について、トマスの説明、解釈を見て来た。(1)の説明はクレアチオを、自然的な作用としての運動、生成と比較したものであり、アリストテレス的な自然観との関係で述べられていると考えられる。(2)の説明は、被造物が自己の存在の原因ではないことに基づいている。これは存在の分有の考え方と関係すると考えられる。(3)の解釈は、トマスの言う如く信仰箇条に属するものである。それ故、信仰と理性の関係の問題と関連すると考えられるであろう。さて、自然的な作用と、クレアチオとの比較に際して、直接関係して来るのは(1)の説明である。従って、この説明を手がかりとして考察を進めて行こう。

II

トマスはクレアチオについて、それは或るものを無から「形成」(facere) することであるとか、或るものが無から「生成」(fieri) することであると述べている。⁽⁶⁾ だが、この「形成」とか「生成」とか言われる厳密な意味は、自然的なそれとは同一ではない。実際トマスは、クレアチオは或る単純な流出 (simplex emanatio) であり、これが生成、形成と言われるのは、その他の産出に対して同名異義的 (aequivoce) に用いられているのだと述べているのである。⁽⁷⁾ 然し乍らトマスは他の箇所、我々の表示の仕方

(modus significandi) は、認識の仕方 (modus intelligendi) に基づくとも述べている。⁽⁸⁾従って、トマスがクレアチオを「形成」「生成」という言葉で表示するのは、クレアチオと自然的作用との認識の仕方において、何かの共通点が存在するからに外ならないであろう。

それでは我々は生成、形成をどのような仕方で認識しているのであろうか。トマスがこの領域で多くを負っているアリストテレスについて若干の考察をしてみよう。ところで、生成 (γένεσις) の問題はアリストテレス自身にとっても、重要な問題であったと思われる。何故ならアリストテレスに先立つ自然を研究した哲学者達にとって、「無からは何物も生成しない」という命題は共通的に、真なる命題として前提されており、或る人々はこの前提から更に進んで、全ての生成・変化の否定にまで到ったからである。⁽⁹⁾また或る人々は、非存在から存在の生成は不可能であるが故に、生成したものはそれ以前に、既に存在していたとし、このものの濃密化と稀薄化、或いは結合と分離とに依って、生成・変化を説明しようとしたのであった。⁽¹⁰⁾これに対して自然界における生成・変化を事実として認めるアリストテレスが、これらの解明のために与えた説明は、主に次の2つの点に在ると思われる。第一は、「自体的に」(καθ' αὐτό) と「付带的に」(κατὰ συμβεβηκός) の区別であり、第二は、「可能態」(δύναμις) と「現実態」(ἐνέργεια) の区別を立てた点である。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

例えば、非存在 (non ens) から或るものが生成する、と言われる時、この非存在は自体的にも、付带的にも理解されるとする。自体的な仕方で理解された場合には、非存在から何物も生成しないことを認めるべきである。だが付帯的な仕方で理解された場合は、どうであろうか。「白くないもの」(non album) から、「白いもの」が生成し、「無教養なもの」から「教養あるもの」が生成することを認めなければならない。そこでアリストテレスは、こういった「欠如」(στέρησις) も、生成の付帯的な原理として認めるのである。⁽¹³⁾

また可能態と現実態の区別に基づいて、純粹の非存在と現実態に在る存在との中間に、可能態における存在を認めることが可能となった。これにより生成を、全くの非存在からでもなく、また既に現実態に在る存在からでもなく、可能態に在るものの現実態への移行として基礎づけることが、可能となったのである。⁽¹⁴⁾

トマスは以上の様なアリストテレスの生成・変化に関する分析を継承し、更にアリス

トテレスの分類に従って、⁽¹⁵⁾生成を端的な生成と或る限定された意味での生成とに区分し、前者を実体自身に関する生成、後者を付帯性に関する生成とする。そしてこの様な生成、ないしその逆の消滅を全体として「変化」(mutatio)と呼び、それらの中で付帯性の変化を「運動」(motus)と呼んでいる。この運動の内には、「場所的变化」「量的変化」「質的变化」が含まれる。

III

さて、自然的作用としての生成、消滅は以上の如く運動と変化とに分かれた。ところで先に〈ex nihilo〉の(1)の説明で見た如く、クレアチオは運動でもなく、生成、従って変化でもないとされる。この点について、もう一度考えてみよう。トマスは運動、変化の概念を説明して、これらの内には「或る同一のものが、以前と今とで別の状態に在る」⁽¹⁶⁾ということが含まれているとする。例えば運動においては、付帯性は変化するが、基体は同一のものとして存続している。端的な生成と消滅においては、実体的形相が導入され、或いは消失するけれども、それらのもとには第一質料 (materia prima) が基体として、同一に存続しているのである。これに対して、クレアチオは全くの無、自体的な非存在からの生成であり、従って無と存在とに対して同一に存続し得るような基体は、⁽¹⁷⁾あり得ないとするのである。

更にまた、トマスはクレアチオは他の自然的な作用と異なって、継次性 (successio) がないとし、従ってそれは「瞬間的」(in instanti) ⁽¹⁸⁾に起るとする。このことは、運動、変化が以前と今という異なる時点における基体の状態の内に、基礎づけられるのに対して、⁽¹⁹⁾クレアチオにはその様な基体の存在しないことから、理解されるように思われる。

トマスはアリストテレスに従って、自然的な生成の原理として、可能態に在るものとしての質料、その者に依って或るエッセを持つところの形相、そして先に見た欠如の3つを挙げている。⁽²⁰⁾ところが、この様にしてクレアチオにおいては、その基体がなく、質料が前提とされないのであるから、この事に依って同時に、可能態における全てのものが前提とされないことになる。例えば我々は建築家が家を作る場合に、建築家を家の存在の原因と言うのであるが、トマスはこの様な場合建築家は、生成 (fieri) の原因であるとしても、存在 (esse) の原因ではないという。⁽²¹⁾何故なら建築家は質料としての材料の内可能態に在った形相を、現実態へと引き出したのであり、材料そのものは前提と

されていたのだからである。

それ故クレアチオが「無から」の形成であるということは、質料を前提して、形相を可能態から現実態へと引き出すことでもなく、予め前提された質料と形相とから、両者の複合体を形成するのでもない。クレアチオとは事物をその全ての根源と共に、存在 (esse) の内へと産出することなのであり、⁽²²⁾従ってそれはまた存在全体の流出 (emanatio totius esse) とも言われるのである。

IV

この様にしてクレアチオは、神からの存在の流出として捉えることが出来る。それでは、この様なクレアチオを行なう第一原因と、自然的作用を行なう被造物としての第二原因との、相違は何であり、何に基づくのであろうか。トマスは「無からは何物も生成しない」という命題を単に、否定したのではなく、この命題を自然的能動者である第二原因においてのみ妥当すると、しているのである。⁽²³⁾

さて、トマスは第一原因たる神を普遍的能動者 (agens universale) と呼び、第二原因である自然的能動者を個別的、ないし特殊的能動者 (agens particulare) と呼んでい⁽²⁴⁾る。この普遍性と個別性について考察してみよう。トマスは能動者が普遍的か個別的かは、その能動者に存在 (esse) がどのような仕方で帰属するかに依るとする。何故なら能動者は現実態に在る限りで働くのだからである。

まず自然的能動者が個別的である、と言われる理由を見てみよう。第一に自分自身との関連で個別的である。何故なら自然的事物は質料と形相との複合体であり、従ってその実体全体に即して現実態に在るのではない。それ故その働きは自然的事物が、それに依って現実態に在るところの形相に依る外はないからである。第二に他の形相に対して個別的である。何となれば、どの自然的事物も一定の類、種へと限定されて存在するからである。従って、この様な形相は「このエンス」の能動者であっても、エンスである限りのエンスの能動者ではあり得ないのである。

これに対し神が普遍的能動者と言われる理由を見てみよう。第一に自分自身との関連において普遍的である。神の内には一切の可能態はなく、神は純粹現実態 (actus purus) だからである。それ故神はその全体に即して働くことが出来る。第二に他の現実態に在るものどもに対して普遍的である。何となれば、それらは全て神の内に起源を有し

ているからである。この様な意味で普遍的といわれる神が、自存する全エッセを産出するのであり、全エッセの根源であるとされるのである。

そしてこの神の能動者としての普遍性と、被造物の有するエッセの持つ普遍性とが対応関係の内におかれる。⁽²⁵⁾被造物においてエッセが第一に原因されるものであり、この端的なエッセに対する第一の固有な原因は、やはり第一にして普遍的な能動者である神でなければならない。それ故、エッセの原因性 (causalitas) は、絶対的 (absolute) な仕方では、第一の普遍的原因へと帰せられる。これに対し、エッセへと付加されるもの、或いはそれによってエッセが特殊化されるものの原因性は、形相づけ (informatio) としての第二原因へと帰せられる。この第二原因は、全存在を産出する第一原因の結果を、いわば前提して働くのである。⁽²⁶⁾

V

従って、或る人々が主張した次の説を、トマスは否定する。⁽²⁷⁾つまり、神は第一の高貴な被造物のみを直接的に産出した。そして、この被造物がより下位の被造物を産出する、という仕方次第に産出が続き、物的被造物の産出に到るとする説である。トマスに依れば、この人々は神が、単純な一者から一者しか生ずることのない自然的必然性によって働くと考えたために、単純で一なる神から、直接多なる被造物が産出されることは出来ないと信じたのであった。これに対してトマスは、被造物の神からの発出は自然的必然性によるのではなく、知識、知性という仕方によって行なわれるのであり、知恵が全てを懐抱する限りにおいて、神から直接的に多なる被造物が発出することに、何の支障もないとするのである。

しかし、神が第一原因であるということは、第二原因に対して、クレアチオの原因であると共に、それらの自然的作用に対して原因として係わることを意味する。トマスは神が自然的作用の原因である4つの理由を、挙げている。⁽²⁸⁾(1)神が自然的事物にその力を与えたことに依り、(2)その力をエッセの内に保存することに依り、(3)その力を働きへと動かすことに依り、(4)神が自然物の働きを自分の働きの道具として用いることに依って、神は自然的作用の原因であるとしている。そして、神はこういった事を、事物の内奥に在るエッセを保持することを通して行なうのであり、トマスは或る意味で、神は自然的作用において直接的に働いているとするのである。

それならば、先に見た説の如く、上位の被造物に下位の被造物を産出する力を認めるというのではないとしても、神がクレアチオに際して、第二原因を道具として用いることはないであろうか。トマスは、神の他の働き、例えば統宰 (gubernatio) や保存 (conservatio) の働きにおいて、第二原因を媒介することを認めており、また第二原因の内に第一原因の力や働きが存在する限りで、第二原因がエッセを与える、という表現も用いているのである。⁽²⁹⁾ だが、トマスはクレアチオを、全くの無からの創造という厳密な意味で理解する場合には、あくまで無限の力を必要とする働きであり、それ故第二原因を道具として用いることはないとするのである。⁽³⁰⁾

VI

さて、冒頭において〈ex nihilo〉についてトマスの挙げている3つの説明、解釈を見た。それは(1)アリストテレス的自然学に関係するもの。(2)被造物における非存在の存在に対する、本性的な先行性に基づくもの。(3)非存在の存在に対する時間的、持続的先行性に基づくもの、であった。この小論においては、主に自然的作用との比較という観点から、(1)の説明を直接の手がかりとして、クレアチオについての考察を進めて来た。この観点から見てみると、トマスのクレアチオ論は、アリストテレスの生成・変化についての考察の成果に基づいた上で、更に質料、形相に対してより内的でより普遍的な存在 (esse) の立場に立つものであり、この立場から神と被造物の関係、そして被造物相互の関係を規定するものと考えられる。この存在の立場からは、自然的作用の自律性が存立され、アリストテレス的自然観が成立すると共に、神と被造物との直接的な関係が基礎づけられているのである。⁽³¹⁾ そしてこの様な存在の原因としての神は、トマスに依って普遍的能動者とされ、この普遍性は神が純粹現実態であり、如何なる限定もうけない本質を有する、存在そのもの (ipsum esse) であるということに基礎づけられるのである。

(2)の解釈、説明は、被造物が自分の存在の原因であり得ず、それ故他者に依存することから、存在の分有 (participatio) と直接的に関係すると思われる。トマスはこの存在の分有という考え方を以て、全ての被造物が神のクレアチオに依って存在することを論証している。それではクレアチオと、存在の分有という2つの概念は相互にどの様な関係にあるのであろうか。この問題の解明のためには、先ず多様な仕方を用いられる

分有の概念そのものの考察が必要であろう。またクレアチオにおける神の意志の役割りについて考察し、これと分有との関係も考察してみなければならない。これは今後の課題⁽³³⁾としたい。

(3)の解釈は自然的世界の持続の始まりについてのものである。最初に見た如く、持続においても非存在が存在に先行した、とする解釈をトマスは論証不可能であり、信仰箇条であるとする。『神学大全』では、⁽³⁴⁾この論証不可能な理由を2つ挙げている。第一は、論証 (demonstratio) というものが、普遍的なものから出発する故に、「今」「ここ」といった特殊的な事項を捨象することに依る。第二は神の意志については、必然的に意志することの外は、これを理性に依って探究することが出来ないことに依るのである。けれども論証不可能ということは、世界が始まりを持つ、という内容自体が不合理であるということではない。逆に、世界に始まりが在るとしても、在らぬとしても理性の立場では成立し得るが故に、⁽³⁵⁾人間理性はいずれか一方のみを真とすることが出来ないのである。この様にトマスがこの解釈を信仰箇条としている基礎には理性に対する誠実さの在ることを認めなければならない。エッセというトマスの立場は信仰と理性に対するこの誠実さに基づいているのである。

註

- (1) この小論は基本的には、トマスの『能力論』第3問に基づいているが、その他にも関連する著作を参照し、引用した。テキストはマリエッチ版を使用した。
- (2) *De pot.* q. 2 a. 3. 尚、拙論「トマス・アクィナスにおける神の出生の力 (potentia generativa) について」(『中世哲学研究』第3号所収) 参照。
- (3) *II Sent.* d. 1 q.1 a. 2.
- (4) Hoc autem creare dicimus, scilicet producere rem in esse secundum totam suam substantiam.
- (5) *De pot.* q. 3 a. 1 ad 7, *S. T.* I q. 45 a. 1 ad 3.
- (6) 例えば、*De pot.* q. 3 a. 1 c. など。
- (7) *In Phys.* VIII 2 n. 974.
- (8) *S. T.* I q. 45 a. 2 ad 2.
- (9) *Physica* I c. 4 187a 26—31.
- (10) *ibid.* I c. 8 191 a 23—33.
- (11) *ibid.* I c. 4.

- (12) *ibid.* I c. 8.
- (13) *ibid.* I c. 7. アリストテレスは原理として、形相 (*εἶδος*)、質料 (*ὕλη*)、欠如 (*στέργησις*) の3つを挙げ、前の2つを第一義的とする。
- (14) これは、トマスの解釈に基づく (*In Phys.* I 9 n. 60)。尚、アリストテレスは運動を定義して「可能的なものとしての限りにおける、可能的なものの完全現実態」 (*actus existentis in potentia secundum quod huiusmodi*) とする。 (*Physica* III c. 1)
- (15) *Physica* V c. 1, *In Phys.* V 3 n. 661.
- (16) *De pot.* a. 2 c. In nomine enim mutationis et transitus designatur aliquid idem, aliter se habere nunc et prius.
- (17) トマスは、我々がクレアチオを或る変化として捉えるのは、非存在と存在とに共通する、一なる時間を想像し、これを基体として考えるからであるという。
- (18) *C. G.* II c. 19, *De pot.* q. 3 a. 1 ad 11. 端的な生成・消滅も或る意味では瞬間的と言えるが、先行するマテリアの状態変化の内に継次性が含まれるのである。
- (19) *C. G.* II c. 19 n. 958.
- (20) *De principiis naturae* c. 1, c. 2.
- (21) *S. T.* I q. 104 a. 1 c.
- (22) *S. T.* I q. 45 a. 4 ad 2.
- (23) *S. T.* I q. 45 a. 2 ad 1, *C. G.* II c. 16 n. 945.
- (24) *De pot.* q. 3 a. 1 c.
- (25) *C. G.* II c. 21 n. 972.
- (26) *De pot.* q. 3 a. 1 c.
- (27) *De pot.* q. 3 a. 4 c. トマスは『原因論』, Avicenna, Algazel を挙げている。尚, *S. T.* I q. 65 a. 3 c. 参照。
- (28) *De pot.* q. 3 a. 7 c.
- (29) *S. T.* I q. 103 a. 6 で *gubernatio* の行使に関して, *S. T.* I q. 104 a. 2 で *conservatio* の二次的な仕方に関して, 被造物を媒介することを認めている。
- (30) 例えば, *De pot.* q. 3 a. 4 c.
- (31) *ibid.* 尚, 人間の魂のクレアチオの場合, トマスはマテリアを, そこから (*ex qua*) 生ずるものとして前提することはないが, その内に (*in qua*) 在るものとしては前提するとし, 従って, 後者の観点から, 自然が整える仕方 (*dispositive*) 働くことを認める。然し, 自然の働きがクレアールされた実体自身にまで及ぶことはないとする (*ibid.* ad 7)。
- (32) 例えば, アリストテレスの運動の永遠性についての論証 (*Physica* VIII c. 1) について, トマスはこの論証によって, アリストテレスが神からの被造物の産出その

ものを否定するとは考えず、ただその産出が永遠的か、始まりを持つかの点においてのみ異なると解釈する。(In Phys. VIII 2 n. 973, 974, VIII 3 n.996)

(33) 山田晶『トマス・アキナスの《エッセ》研究』I 6章参照。

(34) S. T. I q. 46 a. 2 c.

(35) 註(32)参照。